

ある有限数列の総和法について

くまの みつひろ
熊野 充博

§1. はじめに

まず、基本的な事柄をとりあげる。

【定理A】 漸化式 $a_{n+1} = ra_n + f(n)$ ……(*)

の解は次の式で与えられる。(ただし、 r は 0 でない定数とする。)

(1) (*) を、 $r^{-(n+1)} a_{n+1} = r^{-n} a_n + r^{-(n+1)} f(n)$ と変形する。数列 $\{r^{-n} a_n\}$ は階差数列の公式から、 $n \geq 2$ のとき、

$$r^{-n} a_n = r^{-1} a_1 + \sum_{k=1}^{n-1} r^{-(k+1)} f(k)$$

と表されるので、結局

$$a_n = a_1 r^{n-1} + r^n \cdot \sum_{k=1}^{n-1} r^{-(k+1)} f(k) \quad \dots\dots ①$$

と書ける。

(2) (*) の特殊解を $\phi(n)$ とすると、 $a_{n+1} - \phi(n+1) = r(a_n - \phi(n))$ と書けるので、等比数列の一般項の公式から、

$$a_n - \phi(n) = (a_1 - \phi(1)) \cdot r^{n-1} \quad \dots\dots ②$$

と表される([1] など参照)。

さて、これ以外にも解法はあるが、上の①②のいずれが適切であろうか。①の場合、一般解の式が閉じた式で書かれているものの、実際に計算しようとすると、 $\sum_{k=1}^{n-1} r^{-(k+1)} f(k)$ の部分の計算が容易ではない。また、②では、特殊解をどうやって見つけるか、という問題がある。

ところで、この両者を見比べているうちに、発想を逆転(?)させて、次の公式が得られることに気づいた。

【定理B】 下記のタイプの有限数列の総和法は次の通り。

漸化式 $a_{n+1} = ra_n + f(n)$ の任意の解を $\phi_n(r)$ とすると、

$$\sum_{k=1}^n f(k) \cdot r^{k-1} = r^{n-1} \cdot \phi_{n+1}\left(\frac{1}{r}\right) - \frac{1}{r} \cdot \phi_1\left(\frac{1}{r}\right) \quad \dots ③$$

と書ける。

(※) $\phi_n(r)$ は初項にも依存するので $\phi_n(a_1, r)$ と書くべきであるが、煩雑になるので便宜上、 $\phi_n(r)$ と書くことにする。

【定理Bの証明】 仮定により、

$\phi_{n+1}(r) = r \cdot \phi_n(r) + f(n)$ であるから

$$\sum_{k=1}^n f(k) \cdot r^{k-1} = \sum_{k=1}^n \{\phi_{k+1}(r) - r \cdot \phi_k(r)\} r^{k-1}$$

漸化式において $\phi_{k+1}(r) - r \cdot \phi_k(r) = f(k)$ と変形すれば分かるように、左辺は r に無関係である。

よって、 $r \rightarrow \frac{1}{r}$ なる変換を行うと、上式は

$$\begin{aligned} \sum_{k=1}^n f(k) \cdot r^{k-1} &= \sum_{k=1}^n \left\{ \phi_{k+1}\left(\frac{1}{r}\right) - \frac{1}{r} \cdot \phi_k\left(\frac{1}{r}\right) \right\} r^{k-1} \\ &= \sum_{k=1}^n \left\{ r^{k-1} \cdot \phi_{k+1}\left(\frac{1}{r}\right) - r^{k-2} \cdot \phi_k\left(\frac{1}{r}\right) \right\} \\ &= r^{n-1} \cdot \phi_{n+1}\left(\frac{1}{r}\right) - \frac{1}{r} \cdot \phi_1\left(\frac{1}{r}\right) \quad \blacksquare \end{aligned}$$

それでは早速、定理Bの効用(?)を確かめてみよう。

§2. 定理Bの応用例(以下、定数 $r \neq 1$ とする。)

【例1】 $\sum_{k=1}^n k \cdot r^{k-1} = 1 + 2r + 3r^2 + \dots + nr^{n-1}$ を求めよ。

【解】 通常、(7)等比数列の和 $1 + r + r^2 + r^3 + \dots + r^n = \frac{1-r^{n+1}}{1-r}$ の両辺を r で微分する、あるいは、(4)和を S_n とおいて、 $S_n - r \cdot S_n$ を計算する、というのが定番(?)のやり方である。

さて、定理Bを使うと次のようになる。

まず、漸化式 $a_{n+1} = ra_n + n$ の特殊解を求める(求め方は[1]等を参考のこと)。視察により、 $a_n = bn + c$ (b, c は n に無関係な定数)とおくと $b(n+1) + c = r(bn + c) + n$ より $b = rb + 1$ 、 $b + c = rc$ を得る。これを解いて

$$b = \frac{1}{1-r}, c = -\frac{1}{(1-r)^2}$$

そこで、この特殊解を $\phi_n(r)$ とおく。

すなわち $\phi_n(r) = \frac{(n-1) - nr}{(1-r)^2}$ と書けるから、定

理 B を用いて、

$$\begin{aligned} \sum_{k=1}^n k \cdot r^{k-1} &= r^{n-1} \cdot \phi_{n+1}\left(\frac{1}{r}\right) - \frac{1}{r} \cdot \phi_1\left(\frac{1}{r}\right) \\ &= r^{n-1} \cdot \frac{nr^2 - (n+1)r}{(1-r)^2} + \frac{1}{r} \cdot \frac{r}{(1-r)^2} \\ &= \frac{1 - (n+1)r^n + nr^{n+1}}{(1-r)^2} \end{aligned}$$

と比較的(?) 楽な計算で求められる。

(例 2) $\sum_{k=1}^n k^2 \cdot r^{k-1} = 1 + 2^2r + 3^2r^2 + \dots + n^2r^{n-1}$
を求めよ。

[解] まず、漸化式 $a_{n+1} = ra_n + n^2$ の特殊解を求め。視察により、 $a_n = bn^2 + cn + d$ とおく。漸化式に代入すると、結局、

$$b = br + 1, 2b + c = rc, b + c + d = rd$$

を得るから、この連立方程式を解くと

$$b = \frac{1}{1-r}, c = -\frac{2}{(1-r)^2}, d = \frac{1+r}{(1-r)^3}$$

したがって、特殊解 $\phi_n(r)$ は

$$\begin{aligned} \phi_n(r) &= \frac{n^2}{1-r} - \frac{2n^2}{(1-r)^2} + \frac{1+r}{(1-r)^3} \\ &= \frac{(n-1)^2 - (2n^2 + 2n-1)r + n^2r^2}{(1-r)^3} \end{aligned}$$

よって、(例 1) と同様に

$$\begin{aligned} \sum_{k=1}^n k^2 \cdot r^{k-1} &= r^{n-1} \cdot \phi_{n+1}\left(\frac{1}{r}\right) - \frac{1}{r} \cdot \phi_1\left(\frac{1}{r}\right) \\ &= r^{n-1} \cdot \frac{r[(n+1)^2 - \{2n(n+1) - 1\}r + n^2r^2]}{(r-1)^3} \\ &\quad - \frac{1}{r} \cdot \frac{r(1+r)}{(r-1)^3} \\ &= \frac{n^2r^{n+2} - \{2n(n+1) - 1\}r^{n+1} + (n+1)r^2 - r - 1}{(r-1)^3} \\ &= \frac{1+r - (n+1)^2r^n + (2n^2 + 2n-1)r^{n+1} - n^2r^{n+2}}{(1-r)^3} \end{aligned}$$

(※) 公式集 [2] などに上記の解がのっている。

(例 3) $\sum_{k=1}^n k^3 \cdot r^{k-1} = 1 + 2^3r + 3^3r^2 + \dots + n^3r^{n-1}$
を求めよ。

[解] 前述の(例 2)の方法ではかなり煩雑な計算になる(と思う)。

まず、漸化式 $a_{n+1} = ra_n + n^3$ の特殊解を求める。視察により $a_n = bn^3 + cn^2 + dn + e$ とおいてみる。漸化式に代入すると、結局 $b = br + 1, 3b + c = cr, 3b + 2c + d = dr, b + c + d + e = er$ を得るから、この連立方程式を解いて、未定係数 b, c, d, e の値は次のようになる。

$$\begin{aligned} b &= \frac{1}{1-r}, c = -\frac{3}{(1-r)^2}, d = \frac{3(1+r)}{(1-r)^3}, \\ e &= -\frac{1+4r+r^2}{(1-r)^4} \end{aligned}$$

したがって、特殊解 $\phi_n(r)$ は

$$\begin{aligned} \phi_n(r) &= \frac{n^3}{1-r} - \frac{3n^2}{(1-r)^2} + \frac{3n(1+r)}{(1-r)^3} - \frac{1+4r+r^2}{(1-r)^4} \\ &= \frac{(n-1)^3 - (3n^3 - 6n^2 + 4)r + (3n^3 - 3n^2 - 3n-1)r^2 - n^3r^3}{(1-r)^4} \end{aligned}$$

よって、(例 1) と同様に

$$\begin{aligned} \sum_{k=1}^n k^3 \cdot r^{k-1} &= r^{n-1} \cdot \phi_{n+1}\left(\frac{1}{r}\right) - \frac{1}{r} \cdot \phi_1\left(\frac{1}{r}\right) \\ &= r^{n-1} \cdot \frac{r}{(1-r)^4} \cdot (\#) - \frac{1}{r} \cdot \frac{r}{(1-r)^4} (-r^2 - 4r - 1) \\ &= \frac{(\#\#)}{(1-r)^4} \end{aligned}$$

ここで

$$\begin{aligned} (\#) &= n^3r^3 - (3n^3 + 3n^2 - 3n + 1)r^2 \\ &\quad + (3n^3 + 6n^2 - 4)r - (n+1)^3 \\ (\#\#) &= 1 + 4r + r^2 - (n+1)^3r^n \\ &\quad + (3n^3 + 6n^2 - 4)r^{n+1} \\ &\quad - (3n^3 + 3n^2 - 3n + 1)r^{n+2} + n^3r^{n+3} \end{aligned}$$

である。

[注] 代入計算が一見、煩雑に見えるが

$$\begin{aligned} 3n^3 - 6n^2 + 4 &= 3n \cdot n(n-2) + 4, \\ 3n^3 - 3n^2 - 3n - 1 &= 3n \cdot n(n-1) - 3(n-1) - 4 \end{aligned}$$

などを変形しておけば比較的、簡単にすむ。公式集 [2] に上記の解がのっている。

【参考文献】

- [1] 横山政道 「漸化式 $a_{n+1} = ka_n + f(n)$ の一般項を求める統一解法について」 数研通信 No. 53 2003年 8月 p.15
- [2] 室谷義昭・訳(原著はロシア語) 新数学公式集 I (初等関数) 丸善(株) 1991年 p.603
(広島県立沼南高等学校)